

Wright の反懐疑論を批判する¹

徳永 和朗

本稿では、Crispin Wright (2004)に由来する反懐疑論を紹介しつつ、批判する。Wright の反懐疑論は、「私は水槽のなかの脳ではない」などの命題を信じるための証拠を私たちは持つことができないということを認めつつ、私たちはこれらの命題を受け入れるためのエンタイトルメントを持っていると論じるものである。本稿では、このような Wright に由来する反懐疑論のことをエンタイトルメント論とよぶ。

エンタイトルメント論を初めて提示した Wright の論文 (Wright 2004) は、さまざまなアイデアが必ずしも明瞭ではない仕方提示されたものとなっている。私は、Wright に由来する反懐疑論のもっとも強力な私たちは、意思決定理論的な着想を用いた議論であると理解している。そのため本稿では、意思決定理論的な着想を用いるようなエンタイトルメント論に焦点を絞って議論を進める。

本稿では、意思決定理論的な着想によるエンタイトルメント論を、支配戦略からの議論と、期待価値からの議論との 2 種類に分ける。Wright (2004, 2014) が提示しているのは概ね前者の議論であるが、これに対しては複数の有効な反論がなされている。そこで私は第 1 に、Pedersen (2009)のアイデアを借りつつ、意思決定理論的な着想によるエンタイトルメント論としては期待価値からの議論を考えることができ、この議論は、支配戦略からの議論が直面するような課題を抱えない、より有望な議論であるということを示す。しかしながら、私は第 2 に、この新たな議論はまた別の深刻な困難に直面するために成功しないということを論じる。このような論拠から私は、意思決定理論的な着想によるエンタイトルメント論は成功せず、それゆえに Wright の反懐疑論は成功しないと結論する。

本稿は以下のように進む。第 1 節では、Wright が標的とする懐疑論の概要を示すとともに、エンタイトルメント論の全体的方針を明らかにする。そして、

第2節においてその1つのかたちとして支配戦略からの議論を提示し、第3節でそれに対する有力な反論を2つ示す。続いて、第4節において、本稿で検討するもう1つのエンタイトルメント論である期待価値からの議論を提示し、この議論が、第3節で支配戦略からの議論に対して向けられた反論をかかわることができることを示す。第5節では、この期待価値からの議論も、ある深刻な問題を抱えているということを明らかにする。第6節ではまとめとして、本稿の議論を総括し、Wright のエンタイトルメント論は反懐疑論として成功しないということを結論する。

1. エンタイトルメント論の概要

Wright は、懐疑論のもっとも強力なかたちは、以下のような議論によるものだと考えている (Wright 2004: 167-8)。まず、その命題のための保証が得られないならば、ある幅広い思考領域のあらゆる命題のための保証も得られないような命題のことを**礎石命題**[cornerstone proposition]とよぶ。ある命題の信念のための保証[warrant]を持っているとは、すべてを考慮したときに[all things considered]、その命題を信じるのが認識的に合理的であるような状態にすることである。Wright が念頭におく礎石命題の例は、以下のようなものである。たとえば、「私は手のない水槽のなかの脳ではない」という命題は、外的世界についての経験的命題に対して礎石命題となっている。同様に、「私の知覚器官は概ね信頼できる」、「私が直接経験できないことがらについての他人の証言は概ね信頼できる」、「世界は5分前にそれ以前の過去の存在を示すかのような痕跡とともに生じたのではない」、「他人にも心がある」という命題は、それぞれ、知覚によって学ばれる命題、証言によって学ばれる命題、過去についての命題、他人の心的状態についての命題に対して礎石命題となっている。

懐疑論は次のようなステップを踏むものとされる。

- (S1) 信念の非常に大きなクラスについて、礎石命題が存在する。
- (S2) 私たちは礎石命題のための保証を持っていない。
- (S3) よって、私たちは日常的命題のための保証を持っていない。

以上のような懐疑論の構造が現れている具体的な議論として、Wright はデカルト的懐疑論と、ヒュームの懐疑論の 2 種類を挙げ、その概略を示している (Wright 2004: 168-74)。本稿では、これらの懐疑論の詳細には立ち入らない。

続いて、Wright の理解する懐疑論についての補足として、Wright が用いている保証という概念や、それが認識論における内在主義と外在主義との対立とどのように結びついているかを説明する。既に述べたように、ある命題の信念のための保証を持っているということは、すべてを考慮したときに、その命題を信じるのが認識的に合理的であるような状態にることである。この意味では、保証は外在主義的にも、内在主義的にも解釈されうる。しかしながら、Wright は懐疑論を内在主義に根差した問題であると捉えており、懐疑論に対しては内在主義的な応答が必要であると考えている。つまり、Wright によれば、懐疑論に適切に応答するために求められる礎石命題のための保証は、内在主義的なものでなければならない。

内在主義的な保証ということで Wright が何を意図しているのかにははっきりしないところがあるが、ここでは以下のように理解したい。ある命題の信念のための内在主義的保証を持っているということは、合理的議論の場においてその命題を主張することを擁護するために提示できるような理由を持っているために、その命題を信じるのが認識的に合理的とされているということである。Wright によれば、このような内在主義的な保証は、懐疑論者の挑戦に直面したときにも、命題を主張することが認識的に合理的であるとみなされるために求められるものである。Wright の考えでは、知覚器官が現実に信頼できるものであるなどといった、外在主義的な保証を持っていることは、主張の合理性を確保してくれるものではないため、信念のための保証として十分なものとはならない²。

以上を踏まえて本稿では、私たちが礎石命題のための内在主義的な保証を持っているかどうかを問題とすることとし、内在主義的保証については、合理的議論の場において主体が提示できる理由のことでありと捉えることにする。

以下では、エンタイトルメント論の全体的方針を明らかにする。Wright は、懐疑論を以上のように理解したうえで、(S2)を否定するために、懐疑論に対し

である譲歩を行う。Wright は、日常的命題については、私たちはそれへの信念を正当化する証拠を得ることができるが、礎石命題については、私たちはそのような証拠を得ることができないということを認める。ここでいう証拠とは、ある命題が真であることをもってもらしくする、言い換えれば、その命題が真である主観確率を上昇させるようなものであり、正当化とは、証拠によってある命題を信じるのが合理的とされることである。私たちは礎石命題のための証拠を獲得することができないので、礎石命題のための証拠に基づいた保証も獲得することができない。

しかしながら、Wright によれば、私たちは礎石命題のための、いかなる証拠も必要としないような保証を持っている。Wright の考えは、私たちが命題のために持つ保証には、獲得される証拠によってなされる正当化のほかに、証拠によらない認識的エンタイトルメントがあり、礎石命題の場合には、このエンタイトルメントが保証の役割を果たしているというものである。懐疑論が示しているのは、私たちは礎石命題のための証拠を持っていないということであって、このことは、私たちは礎石命題のための保証を持っていないという(S2)を帰結しない。Wright によれば、エンタイトルメント論は、デカルト的懐疑論およびヒュームの懐疑論への統一的応答を提供する統一戦略の役割を果たす³。

それでは、どうして礎石命題のためのエンタイトルメントが認められるのか。Wright (2004)は、エンタイトルメントが認められることを擁護する議論を4つ示しており、それぞれ戦略的エンタイトルメント、認知的プロジェクトのエンタイトルメント、合理的熟慮のエンタイトルメント、実体からのエンタイトルメントとなづけている。Wright (2014)では、他のエンタイトルメントについては言及せずに、戦略的エンタイトルメントを再評価している。

以上がエンタイトルメント論の概要である。私の考えでは、有望なエンタイトルメント論は意思決定理論的な着想を用いた議論であり、次節以降で検討するのはそのような議論である。そのような議論は戦略的エンタイトルメントおよび認知的プロジェクトのエンタイトルメントから読み取ることができるが、本稿では、Wright によるエンタイトルメント論の名称・区分には従わずに議論を進める。

2. 支配戦略からの議論

本節では、私が**支配戦略からの議論**とよぶ、エンタイトルメント論を詳細に発展させた議論の1つを提示する。

簡便のため、以下では特定の礎石命題に焦点を合わせる。次のような仮説を考えよう。

BIV 仮説：「私はマッドサイエンティストの実験に利用されている手のない水槽のなかの脳[brain-in-a-vat]であり、私に与えられる経験は、コンピュータが電極を介して脳に与えた刺激によって生み出されているものに過ぎず、世界のあり方を反映したものではない」（この命題を **BIV** とする）が真である。

ここで、「**BIV** 仮説は偽である」は、外的世界についてのすべての経験的命題にとって礎石命題である。この命題を一**BIV** とし、この命題を礎石命題の例として議論を進める。

支配戦略からの議論が着目するのは、礎石命題を信じることは、礎石命題を信じないことよりも、認識的に良い帰結をもたらす見込みがあり、かつ認識的に悪い帰結をもたらすということはないという点である。意思決定理論の用語を借りるならば、認識実践における意思決定において、礎石命題を信じるという戦略は、礎石命題を信じないという戦略を支配[dominate]している、支配戦略[dominant strategy]となっている。支配戦略からの議論は、このことを根拠として、私たちは礎石命題のためのエンタイトルメントを持っていると論じるのである（Wright 2004: 178-84, 191-2, 2014: 224-8）。

礎石命題を信じるのが支配戦略となっているということを明らかにしよう。一**BIV** に関して、私がつとれる戦略は、この命題を信じるか信じないかである。現実には、私は水槽のなかの脳であるか、または水槽のなかの脳ではないかのどちらかである。このような状況は以下のようなマトリクスで表現することができる（表1）。

表 1 (Wright 2014: 227)

	¬BIV が真	¬BIV が偽
¬BIV を信じる	数多くの真で役に立つ信念	極少数の真で役に立つ信念
¬BIV を信じない	極少数の真で役に立つ信念 (あるいは、真で役に立つ数多くの信念が得られるが、それらの信念を獲得した手法への信念を欠くという不整合を抱える)	極少数の真で役に立つ信念

このようなマトリクスによると、世界において¬BIV が真であるとするならば、私は¬BIV を信じたほうが認識的に良い帰結を得られる。また、世界において¬BIV が偽であるとしたとしても、私は¬BIV を信じることによって認識的に悪い帰結に陥るということはない。つまり、「¬BIV を信じる」という戦略は、世界のあり方がどうであれ常に「¬BIV を信じない」という戦略をとるよりも同等以上に望ましい帰結を生み出している。それゆえに、私が¬BIV を信じることは私にとって合理的であるから、¬BIV を信じるエンタイトルメントが認められるのである。

本節の以下の部分では、以上のような支配戦略からの議論に対して向けられる反論のうち、正しくないと考えられるものを2つ検討し、それに応答することによってこの議論を補足する。第1の反論は、以下のようなものである。Wright の議論は、礎石命題を信じるための実践的[pragmatic]保証を与えているだけであって、認識的保証を与えていない。「実践的な観点から礎石命題を信じたほうが良い」ということははじめから明らかなことであって、懐疑論者が求めているのはそのようなものではない。そのため、Wright の議論は懐疑論に対する応答として不十分である (Pritchard 2005: 205-8)。

Wright はこのような反論に対して以下のように応答している (Wright 2014: 235-9)。支配戦略からの議論との比較を行うために、17世紀の哲学者パスカルに由来する「パスカルの賭け」とよばれる議論を考えてみよう。この議論は、意思決定理論的な着想に基づいて、私たちは神の存在を信じるべきだとい

とを論じる。この議論によれば、神の存在を信じるべきか、信じないべきかの選択によって、死後にどのような帰結が得られるかという状況は、おおまかにいって、以下のようなマトリクスで表現できるという（表 2）。

表 2 (Wright 2014: 236)

	神は存在する	神は存在しない
神の存在を信じる	永遠の至福	忘却[oblivion]
神の存在を信じない	悪いところ	忘却

このような状況においては、神の存在を信じるという戦略は支配戦略になっているため支持される。すなわち、神が存在したとするならば、神の存在を信じたほうが多くの利益が得られるのであり、神が存在しなかったとしても神の存在を信じることによってなんら損害は発生しないのだから、私たちは神の存在を信じるべきだ、という議論である。

パスカルの賭けは、たとえその議論が成功しているとしても、神の存在を信じる認識的保証を与えているとは考えがたい。せいぜいのところ、この議論は神の存在を信じるための実践的保証を与えているだけであるように思われる。

Wright は、このことを認めつつ、パスカルの賭けと支配戦略からの議論との重要な違いを指摘する。それは、パスカルの賭けでは賭けられている価値が快・不快といったものであるのに対し、後者の議論では賭けられている価値が真理の獲得や世界の理解という認識価値であるということである。Wright の考えでは、支配戦略からの議論においては、賭けられている価値が認識価値であるために、パスカルの賭けの場合とは異なって、与えられる保証は認識的なものであると論じる。以上のような Wright の議論を踏まえるならば、支配戦略からの議論が提供する保証が、十分に認識的ではない、あるいは懐疑論者への応答として十分ではないと反論者が論じるためには、さらなる議論が必要であると考えられる^{4,5}。

第 2 の反論は次のものである。支配戦略からの議論は、認識的に良い帰結を得るためには一BIV を信じるのが少なくとも必要であると論じているが、一BIV という命題に仮説のような地位を与えて、そのもとで日常的命題を信じ

れば、一BIV を信じずとも認識的に良い帰結を得る見込みがあるだろう。それゆえ、支配戦略からの議論が挙げているような論拠は、せいぜい一BIV を日常的命題を信じるための前提とみなす[*take for granted*]ことを合理的にする役割しか果たせない。それならば、支配戦略からの議論によって認められる命題的態度は、一BIV の真理に対して中立的な[*agnostic*]態度に留まり、懐疑論に応答することにおいて求められている命題的態度として不十分であるだろう⁶。

私は、このような反論は正しくないと考える。一BIV を前提とみなしそのもとで通常の認識実践を行っているとしても、一BIV を信じていない限りで、その主体は明白な不整合に陥っている。自分には手があると信じているが、自分が水槽のなかの脳ではないとは信じていない主体に対し、懐疑論者は信念の不整合を容易に見出し、その主体を非合理的だとみなすだろう。認識的に良い帰結を得るためには、一BIV を前提とみなすことは決して十分ではなく、一BIV を信じていることこそが求められているのである。このような事情があるからこそ、表 1 で示されている意思決定の状況は、一BIV を日常的命題を信じるための前提とみなすかどうかの選択ではなく、一BIV を信じるかどうかの選択となっている。そのため、支配戦略からの議論によって認められる命題的態度が、一BIV の真理に対して中立的な態度に留まっているという批判はあたらない⁷。

3. 支配戦略からの議論に対する反論

本節では、第 2 節で論じた支配戦略からの議論に対する、有効と考えられる反論を 2 点取り上げる。私の考えではこれらの反論は強力なものであり、支配戦略からの議論が正しくないと考えするのに十分なものである。

第 1 の反論は、支配戦略からの議論には充分性について反例がある、すなわち、支配戦略からの議論によれば認識的保証が認められるが、そのような保証が認められるとは直観的に考えがたい事例があるというものである。Wright 自身が考察している次の事例を考えよう (Wright 2014: 241-2)⁸。いたずら好きだが慈悲深い悪霊が、あなたがゴールドバッハの予想を証拠なしで信じたならば、数学的探究における、だれも夢見たことのない非常に強力な真理生産の方法を授けようと提案してきた。支配戦略からの議論によれば、このときにゴールド

バッハの予想を証拠なしで信じることはあなたにとって支配戦略であるから、このような提案を受け入れることにあなたは保証されているはずである。しかしながら、このような提案を受け入れることは、私たちが認識実践を行っていくにあたって合理的なことではないように思われる。Wright はこのような事例の存在を、エンタイトルメント論の抱える問題として認識しており、エンタイトルメント論が乗り越えるべき課題であるとみなしている。

第2の反論は、Pedersen による以下のようなものである (Pedersen 2009: 450-1)。一BIV を信じるのが支配戦略になると Wright が考えているのは、真理の獲得のみを認識価値とみなしているからであるように思われる。しかしながら、もし真理のみが認識的に価値のあるものならば、私たちはあらゆる命題を信じることで認識価値を最大化できるはずである。そして、あらゆる命題を信じるのが認識的に合理的なことであるとは到底考えられない。ここでの自然な考えは、誤りを回避することには認識価値があるというものである。すなわち、認識価値には真理の獲得だけではなく、誤りを回避するという要素が何らかのかたちで含まれているはずである。

このように考えたときには、世界において一BIV が偽であったときには、一BIV を信じることは、数多くの偽なる信念を持つことをもたらすので、一BIV を信じないことよりも悪い帰結を持つことになる (表3)。そのため、一BIV を信じることは支配戦略ではなく、Wright の議論は成功しない。

表 3

	¬BIV が真	¬BIV が偽
¬BIV を信じる	数多くの真で役に立つ信念	極少数の真で役に立つ信念 数多くの偽なる信念
¬BIV を信じない	極少数の真で役に立つ信念 (あるいは、真で役に立つ数 多くの信念が得られるが、 それらの信念を獲得した手 法への信念を欠くという不 整合を抱える)	極少数の真で役に立つ信念

4. 期待価値からの議論

本節では、エンタイトルメント論を発展させるもう 1 つの方法を提示する。まず、前節で提示した、支配戦略からの議論に対する第 2 の反論を受け入れよう。つまり、偽なる信念には負の認識価値があるため、¬BIV を信じることは ¬BIV を信じないことを支配している戦略ではないということは受け入れる。その上でも ¬BIV を信じることのエンタイトルメントを擁護する 1 つの方法は、¬BIV を信じるのが、¬BIV を信じないことよりも高い認識価値をもたらすことが期待される戦略であると論じることである。このような議論は、支配戦略ではなく、期待（認識）価値の概念に訴えるため、このような議論を**期待価値からの議論**とよぶことにしよう。

Pedersen はこのような議論への道筋を示している (Pedersen 2009: 451-3)⁹。まず、前節までの意思決定マトリクスに、確率という要素を加える。¬BIV が真である確率を p とし、¬BIV が偽である確率を $1-p$ としよう。¬BIV が真であるとして、¬BIV を信じたときに主体が得られる認識価値を v_1 、¬BIV を信じないときに主体が得られる認識価値を v_2 とおく。¬BIV が偽であるとして、¬BIV を信じたときに主体が得られる認識価値を v_3 、¬BIV を信じないときに主体が得られる認識価値を v_4 とおく (表 4)。

表 4

	¬BIV が真 (p)	¬BIV が偽 ($1 - p$)
¬BIV を信じる	v_1	v_3
¬BIV を信じない	v_2	v_4

このとき、¬BIV を信じるという戦略をとることで得られる期待値は $pv_1 + (1 - p)v_3$ 、¬BIV を信じないという戦略をとることで得られる期待値は $pv_2 + (1 - p)v_4$ となる。期待値からの議論が成功するためには、前者の期待値が後者の期待値を上回っていることが必要であり、この条件は次のように表せる。

$$(1) pv_1 + (1 - p)v_3 > pv_2 + (1 - p)v_4$$

変形して次を得る。

$$(2) p(v_1 - v_2) > (1 - p)(v_4 - v_3)$$

期待値からの議論は、このような枠組みにおいてこの条件が成り立っていることを示そうとする議論ということができる。

ここで Pedersen が検討するのは、 p は $1 - p$ よりも大きいと考えることができるかどうかである。そう考えることができれば、(2) が成り立っていると考える理由になることから、Wright のエンタイトルメント論を擁護できることになる。

Pedersen の考えでは、このような道筋はうまくいかない。既にみたように、Wright のエンタイトルメント論は、私たちは¬BIV のための証拠を得ることができないということを懐疑論者に譲歩していたものであった。そして、証拠とは、¬BIV が真である確率を高めるようなもののものであった。すなわち、Wright のエンタイトルメント論は、¬BIV が真であるということは¬BIV が偽であるということよりもっともらしくないということを受け入れたところから出発している。そのため、 p が $1 - p$ よりも大きいと考える理由は Wright には利用可能ではない。

それでは、 p と $1-p$ に対して、どのような確率配分を行うのがもっともらしいだろうか。一BIV の証拠を得ることができないということとともに、一BIV を否定する証拠も得ることができないということを認めるならば、 $1-p$ もまた p より大きくないと考えられるから、 $p = 1-p = 0.5$ と考えるのがもっともらしい。この場合には、(2)が成り立っていると考える理由は得られない。従って、Wright のエンタイトルメント論をこのような考えによって擁護することはできない。

Pedersen の以上のような議論の枠組みを受け継ぎつつ、私は、期待価値からの議論にはまだ有望な道筋が残されていると考える。私の考えでは、支配戦略からの議論およびここまでの期待価値の議論には、Wright の議論を支えている重要な直観が抜け落ちている。それは、私たちは礎石命題を信じなければ、まともな認識活動を行うことができなくなってしまうという論点である。Wright の言葉 (Wright 2004: 191) を借りれば、礎石命題を信じなければ私たちは認知的麻痺[cognitive paralysis]に陥ってしまう。礎石命題を信じるのが合理的に思われるのは、認知的麻痺を避けるためである。Wright は次のように述べている。

このような[懷疑論への]応答は、最良の懷疑論は私たちに教訓——懷疑論が示す正当化の限界は真正であり本質的であるということ——をもたらすということ認めつつも、まさにその理由によって、認知的達成はそのような限界の内側で起こることとみなさなければならないと返答する。その限界を乗り越えようとする試みは、厳密性や堅実性を高めるどころか、認知的麻痺に陥るだけである。(Wright 2004: 191)

認知的麻痺とはどのような状態か。Wright や、類似の概念に言及する他の論者¹⁰もその内実については踏み込んでいないが、ここでは、認知的麻痺に陥っていない状態を以下のように定めることによって、認知的麻痺の条件を定めることを提案する。

(CP) ある主体 S が認知的麻痺に陥っていないのは、世界についての経験的情報をもたらす認識手段を S が有しており、また S がそのことを整

合的に信じているときそのときに限る。

たとえば、自分は水槽のなかの脳ではないと私が信じていないならば、私は認知的麻痺に陥っている。というのも、自分が水槽のなかの脳ではないと信じていないならば、私は知覚が世界についての情報をもたらすものであると整合的な仕方では信じることもできないからである。そして、このとき世界についての経験的情報をもたらさう知覚以外の利用可能な認識手段はありそうにない。

(CP)の動機づけとしては次のようなものが考えられる。認識活動とは、特定の視野に立ったもて世界についての理解を得ていくことであると捉えられる。そのため、世界についての経験的情報を得ていくこと、またそれがどのような手段でなされているか、すなわち主体と世界がどのように結びついているのかの理解を得ることは、認識活動にとってきわめて重要であると考えられる¹¹。

認知的麻痺という考えを用いることによって、期待価値からの議論をエンタイトルメント論の有望な議論として擁護することができる。既に述べたように、エンタイトルメント論を擁護するためには、(2)が成り立っていると論じればよいのであった。さらに、Pedersen が指摘するように、 $p = 1 - p = 0.5$ と考えることはもっともらしいから、(2)は、

$$(3) v_1 - v_2 > v_4 - v_3$$

となると考えられる。

ここで、次が成り立っていると考えられる。

$$(a) v_1 - v_2 > 0 \text{ かつ } v_4 - v_3 > 0$$

$$(b) |v_1 - v_2| > |v_4 - v_3|$$

(a)については、 $v_1 > v_2$ 、 $v_4 > v_3$ から帰結する。 v_1 、 v_4 は、それぞれの世界の状態において適切な信念状態をとったときの認識価値であるから、それぞれ v_2 、 v_4 よりも大きいと考えられる。(b)については、 v_1 を得ているときのみが認知的麻痺を脱しているときであるということに気づけばよい。そのため、 v_1 と v_2 で

は認知的麻痺を脱しているかどうかという大きな違いがあるのに対し、 v_4 と v_3 ではどちらも認知的麻痺の状態であるに過ぎない。認知的麻痺から抜け出すということに大きな認識価値があるという考えはもっともらしいから、 v_1 と v_2 の差は、 v_4 と v_3 の差よりもはるかに大きいと考えることができる。

ここで、(a)と(b)からは(3)が帰結する。以上より、(3)は成り立っていると考えられるから、偽なる信念には負の認識価値があるということをも認めたととしても、期待価値および認知的麻痺という概念を用いることによって、エンタイトルメント論として期待価値からの議論を擁護することができる。ここでは v_1 のみが認知的麻痺を抜け出したときに得られる認識価値であるということが重要である。—BIV が偽であるときには世界についての情報をもたらす認識手段を私は持っていないし、—BIV を信じていないときには主体は自分が世界についての情報をもたらす認識手段を持っているということを整合的な仕方では信じていることができないため、これらの場合においては私は認知的麻痺に陥っているのである。

第3節では、支配戦略からの議論に対して、Pedersen による第2の反論のほか、もう1つ反論を提示した。その反論は、支配戦略からの議論には十分性についての反例が生じてしまうというものだった。しかしながら、本節で論じた期待価値からの議論には、支配戦略からの議論を悩ませたような事例は問題とならない。なぜならば、第3節で提示したゴールドバッハの予想についての事例において、私は認知的麻痺に陥っていないからである。私は、悪霊の奇妙な予想を受け入れなくとも、ゴールドバッハの予想を解決するような数学的推論および知覚、証言などの認識手段を持っているのである。そのため、このような事例について、問題となっている命題を信じなければ認知的麻痺に陥るといふ状況が成り立っておらず、期待価値からの議論を適用することはできない。そのため、期待価値からの議論には、支配戦略からの議論に生じたような十分性についての反論は生じない。

こうして期待価値からの議論は、支配戦略からの議論に提示された2つの反論を回避することができる。期待価値からの議論は、Wright のアプローチに就いた具体的議論として、有望であるように思われる。

5. 期待価値からの議論に対する反論

前節のような期待価値からの議論には、ある問題が潜んでいる。本節では、期待価値からの議論を脅かすこの問題について論じる。

期待価値からの議論においては、一BIV が偽である状態と、一BIV が真であり、私たちの知覚が正常に働いているという状態にそれぞれ確率 0.5 が付されていた。ここでは、現実の状態が複数考えられ、どちらか一方を支持するような理由が特になければ、それぞれの状態に等しい確率を付与するべきであるという無差別原則[principle of indifference]の一種が用いられていると考えられる。

しかしながら、無差別原則に対しては、状態をどのように区別すればよいのかについて明確な指針が存在しないことが問題を引き起こすということがよく知られている。そして、期待価値からの議論で用いられているような無差別原則においても、この問題は当てはまるように思われる。

問題の核心は、BIV 仮説以外にも、外的世界についてのすべての経験的命題についての信念の保証を脅かすような懷疑論的仮説は数多くあるということである。このことを踏まえるならば、一BIV が真であったとしても、そのことは私たちが認知的麻痺を脱しているということを直ちには意味しない。そのため、外的世界についての経験的命題に関する懷疑論を否定するためには、一BIV を信じることの保証を確保するだけでは不十分であり、「私の知覚は、私たちを体系的かつ全面的に欺いていない」というような命題（一Deceived とおく）を信じることの保証を確保することが必要である。

ここで、状態空間¹²を前節までとは異なるように切り取ったならば、期待価値からの議論は、一Deceived を信じることに私たちが保証されているということを示さないということを論じることができる。まず、BIV 仮説に加えて、次のような仮説を導入する。

夢仮説：「私は整合的で持続的な夢を見ている」（Dream とおく）が真である。

悪霊仮説：「全能の悪霊によって私はあらゆる点で欺かれている」(Demon とおく) が真である。

ここで考える状態空間の切り取り方は次のようなものである。¬Deceived, BIV, Dream, Demon の 4 つの命題のいずれかが真である状態は包括的かつ排他的であると考えるから、それぞれが成り立っている状態のどれか 1 つが現実において成り立っている。そのため、このような設定では、次のような意思決定マトリクスを考えることができる (表 5)。

表 5

	¬Deceived	BIV	Dream	Demon
¬Deceived を信じる	v'_1	v'_3	v'_3	v'_3
¬Deceived を信じない	v'_2	v'_4	v'_4	v'_4

いずれかの懐疑論的仮説が正しいという状態で、¬Deceived を信じるという戦略をとったときに得られる認識価値は、3 つの懐疑論的仮説のうちのどれが正しいかによっては変化しないと考えるから、この認識価値は成り立っている懐疑論的仮説によらず一定 (v'_3) とみなすことができる。同様に、¬Deceived を信じないという戦略をとり、かついずれかの懐疑論的仮説が正しいときに得られる認識価値も、どの懐疑論的仮説が正しいかによっては変化しないと考えることができるから、この認識価値は懐疑論的仮説によらず一定 (v'_4) とみなすことができる。

期待価値を計算するために、合理的主体が命題に対して持つ確率関数を Pr とおこう。¬Deceived, BIV, Dream, Demon の 4 つの命題については、そのうちのどれか 1 つが成り立っていることを支持するいかなる理由もないと考えられるため、期待価値からの議論で用いられたような無差別原則を用いるならば、 $\text{Pr}(\text{¬Deceived}) = \text{Pr}(\text{BIV}) = \text{Pr}(\text{Dream}) = \text{Pr}(\text{Demon}) = 0.25$ とするのが合理的である。このときに、¬Deceived を信じるのが合理的とみなされるためには、期待価値を考えることにより、次の条件が成り立っていることが必要であると考えられる。

$$(4) 0.25v'_1 + 0.75v'_3 > 0.25v'_2 + 0.75v'_4$$

変形して次を得る.

$$(5) v'_1 - v'_2 > 3(v'_4 - v'_3)$$

それでは、この条件は成り立っているだろうか。前節でみたように、 v'_1 を得ているときのみにおいて、主体は認知的麻痺を脱することができるから、 v'_1 の値は v'_2 、 v'_3 、 v'_4 の値よりもはるかに大きい。しかしながら、この式と、前節での(3)を見比べるならば、この式においては右辺は3倍されている。前節での(a)と同じ理由より、(5)の両辺は正である。そのため、本節のような設定においては、(5)が成り立っているかどうかははっきりとしなくなり、期待価値からの議論が成功しているかどうかは明らかではなくなる。

この問題はより先鋭化させることができる。さまざまに考えられる懐疑論的仮説をどのように区別すべきであるのかはまったく明らかではないからである。たとえば、Bostrom (2003)で検討されている次のような仮説がある。

シミュレーション仮説：私たちは、私たちよりはるかに高度な技術を持った文明のコンピュータによって生み出されたシミュレーションである。

この仮説も外的世界についてのあらゆる経験的命題を信じる保証を脅かす懐疑論的仮説である。そのため、この仮説を上記の考慮に加えるだけで、一Deceivedを信じることによって得られる期待価値を低下させることができる。

あるいは、映画『マトリックス』の設定になぞらえた次のような仮説を考えてみよう。

マトリックス仮説：人類は高度な知能を有する機械によって支配されている。人類は機械によって身体ごと水槽のなかに「栽培」されており、電極につながれて、機械によって生み出された仮想現実（マトリックス）を

経験している。

マトリックス仮説と BIV 仮説は類似している。しかしながら、BIV 仮説が成り立っている状態と、マトリックス仮説が成り立っている状態は明らかに別のものとして理解することができる。そして、両者を区別する状態として上記の考慮に加えるならば、一Deceived を信じることによって得られる期待値はさらに低下することになる。

同様に、区別して理解することのできる懐疑論的仮説は非常に数多く存在する。期待値からの議論で用いられている無差別原則によって、これらの仮説が成り立っている状態すべてに等確率が付与されるのならば、一Deceived が成り立っている状態に与えられる確率はわずかなものであるから、一Deceived が成り立っていると信じることによって得られる期待値が、一Deceived が成り立っていないと信じることによって得られる期待値を上回っているとは考えがたくなる。そのため、期待値からの議論は成功しない。

以上が期待値からの議論に対する反論である。このような議論に対しては、期待値からの議論が成功するような状態空間の切り取り方も数多くあると反論されるかもしれない。たとえば、一Deceived が成り立っている状態を複数に区別することは可能であり、それらの状態がそれぞれ無差別原則によって等確率を与えられる状態であると考えられることもできる。あるいは、一Deceived が成り立っている状態と、成り立っていない状態の2つのみが、無差別原則によって等確率を与えられる状態であり、さまざまな懐疑論的仮説は、一Deceived が成り立っている状態のもとでの下位分類に過ぎないと考えることもできるだろう。しかしながら、ここでの問題は、期待値からの議論が成功するような状態空間の切り取り方を、期待値からの議論が成功しないような状態空間の切り取り方よりも優先する理由が見当たらないことである。このような理由が提出されない限り、期待値からの議論が成功するような状態空間の切り取り方を選択することは、アドホックであり、懐疑論に対して論点先取である。そのため、本節の反論に対してこのように応答することは認められない¹³。

前節において一BIV が偽である状態と、一BIV が真であり、私たちの知覚が正常に働いているという状態にそれぞれ確率 0.5 が付されていたことの根拠と

しては、私たちには—BIV を信じることも、—BIV の否定を信じることの証拠もないという前提が用いられていた。本節の議論から示唆されることは、ある命題を肯定あるいは否定するためのいかなる証拠もないということは、その命題が正しいことに付与される合理的確率が 0.5 であるということの意味しないということである。0.5 という確率を付与するにあたっては、その命題が成り立っている状態と、成り立っていない状態の 2 つの状態のみを考えて無差別原則を適用するということがなされていると考えられるが、状態空間の切り取り方はさまざまであり、それぞれの切り取り方に無差別原則を適用することは、互いに相いれない結果を生み出してしまうからである¹⁴。証拠と確率の結びつきは、本稿がはじめ想定していたような単純なものではない。

6. まとめ

本稿では、Wright のエンタイトルメント論を意思決定論的な議論として肉付けする 2 つの方法を区別し、このどちらのエンタイトルメント論も成功しないということを論じた。

一方では、私が支配戦略からの議論とよんだ議論がある。この議論は 2 つの問題に直面する。1 つは、充分性についての直観的な反例があることであり、もう 1 つの問題は、偽なる信念は負の認識価値を持つということを考慮に入れるならば、礎石命題を信じるのが礎石命題を信じないことを支配している戦略であることは疑わしいというものである。

他方では、私が期待価値からの議論とよんだ議論がある。私は、期待価値からの議論は、認知的麻痺という概念を用いることによって、支配戦略からの議論に対して提起された 2 つの問題を回避することができるということを論じた。しかしながら、私はさらに、期待価値からの議論はある種の無差別原則を用いるものとなっているために、この原則がはらむ問題によって深刻な困難を抱えているということも示した。

エンタイトルメント論として最も有力な議論は意思決定論的な着想にもとづく議論であるという本稿の前提を踏まえて、以上より、エンタイトルメント論は反懐疑論として正しくない議論であると私は結論する¹⁵。Wright の反懐

疑論が正しくないという本稿の結論は、私たちが懐疑論を受け入れなければならないということの意味しない。エンタイトルメント論は、一BIV のための証拠を私たちは得ることができないということを認める点で懐疑論に対して大きく譲歩し、一BIV の信念の合理性を例外的な仕方擁護しようとする議論であるが、私が見るところでは、懐疑論に対するこのような譲歩は行き過ぎである。1 つには、Wright は懐疑論に対する外在主義的な応答は一般的に不十分であり、それゆえに懐疑論に対する内在主義的な応答が望まれているということを主張しているが、このことを否定する道筋があり得るだろう。あるいは、Wright のような内在主義を受け入れたとしても、懐疑論に対して正面から応答する道筋はいくつか提案されている¹⁶。本稿が示すのは、懐疑論に対してはエンタイトルメント論とは異なる応答が求められているということまでである。

註

1. 本稿の内容は、2016年7月に行われた、哲学若手研究者フォーラムにおける個人研究発表に基づいたものであるが、大幅な加筆修正が施されている。高田敦史氏、鈴木佑京氏からは、本稿の草稿にコメントをいただいた。また、フォーラムの場での議論、とりわけ高田敦史氏からの質問は、本稿に反映されているはずである。皆様に感謝しておきたい。
2. 認識論的内在主義／外在主義と、懐疑論との関係については Wright はさまざまところで議論を行っている。Wright (2004: 209-11, 2007: 30-1, 2008: 509-16, 2014: 220) を参照。最新の論文 (Wright 2014: 220) において Wright は、内在主義 (あるいは外在主義) 的保証という特徴づけは不適切であると論じている。そこにおいては Wright は、懐疑論に応答することにおいては、礎石命題を信じるための保証だけではなく、礎石命題を主張するための保証も求められているのであると論じ、知覚器官の信頼性などによってもたらされる保証は信念のための保証とはなっても主張するための保証とはなりえないため不十分であると論じている。そのため、本稿のような設定は最近の Wright の意図に正確に沿ったものとなっていない。しかし、議論の場において提示できるような礎石命題のための理由が求められているということは依然として変わらないこと、また Wright が「信念のための内在主義的保証」というような従来の語り方を放棄したことには、本稿の内容とは直接の関係を持たない知覚の認識論上の動機が大きいということ踏まえるならば、本稿のように議論を進めることにとりわけ問題は生じないと考えられる。
3. 本稿は、エンタイトルメント論によって礎石命題への信念が擁護できるのかどうかを問題としているが、Wright (2004) は、私たちがエンタイトルメントを認められる命題的態度は信念ではなく、合理的信頼[rational trust]であると論じている。Wright によれば、

信念や合理的信頼はともに信念的受容[doxastic acceptance]という大きなカテゴリーに属するものである。Wrightによれば、信念は証拠によって統制されるものであり、受容は、証拠に基づかずとも認められるということによって信念と異なるものである(Wright 2004: 175-8, 182-3, 192-4)。しかしながら、このような区別は重要なものではない。まず、信念は証拠によって統制されるものであるという規定のみが信念と合理的信頼を区別しているが、Wright本人が、信念が証拠によって統制されるものであるかどうかについて疑念を示している(Wright 2004: 176)。また、礎石命題への信念が認められないということは、Wrightのエンタイトルメント論にとって問題をひき起こす一因となるおそれがある(Tucker 2009, Volpe 2012)。一方で、信念についてのこの規定を外すことがどのような問題を引き起こすのかは明らかではない。そのためWrightに由来する議論によって礎石命題への信念を持つことを擁護しようとする論者もいる(Hazlett 2006, Volpe 2012)。以上の理由から、本稿では、エンタイトルメントが認められる命題的態度は信念であるとして議論を進めることによってWrightあるいはエンタイトルメント論の意図はほとんど損なわれないと判断し、そのように議論を進めている。

4. Jenkins (2007: 32-3)はより早く類似の議論を行っている。この反論を提起したPritchardは、のちにこのような応答の有効性を認めている(Pritchard 2015: 80)。
5. 関連する論点として次のようなものがある。エンタイトルメントという認識的理由は、特定の目標を踏まえたうえでその達成のための適切な手段を採用するという合理的理由、すなわち道具的理由の一種であるように思われる。しかしながら、認識的理由(合理性)を道具的理由(合理性)の一種として還元的に理解する道具主義[instrumentalism]とよばれる立場には、Kelly (2003)に代表されるような力強い反論がある。本稿では、道具主義の是非、および道具主義が誤りであるならばエンタイトルメント論も誤りとなるのかという論点については判断を差し控えることとし、考察しない。ただし、Wrightは、エンタイトルメントが道具的理由の一種として理解できるということは、認識的理由の特殊な場合が道具的理由として理解できるということの意味するにすぎず、認識的理由のあらゆる場合が道具的理由の一種であるということの意味しないとして、エンタイトルメント論は道具主義と命運を共にしないと応答している(Wright 2014: n. 39)。
6. Pritchardはこのような種類の反論を提示している(Pritchard 2015: 80-4)。
7. Jenkins (2007: n. 4, 9)は類似の指摘を行っている。
8. Brueckner (2007: 286)も類似の事例を挙げている。
9. 期待価値に訴える議論の以下のような形式化は、Pedersenの議論を、より具体的により簡潔に改めたものである。
10. Pritchard (2005, 2015), Hazlett (2006)は、Wrightの議論の中心をこのような認知的麻痺にみているように思われる。しかし、彼らが提示・紹介する議論の内実は私のものとは異なっている。また、Jenkins (2007:35-6)が示唆しているのもこのような議論であるように思われる。
11. 動物は自らが行う経験的情報の獲得についての反省的理解を持っていないと考えられるが、そのような反省的理解を持つことは——Wrightのような内在主義者にとっては特に——人間の認識活動にとってきわめて重要なことである。認知的麻痺に陥っていないということに、自らが持つ認識手段についての整合的的信念が求められるのは、そのためである。
12. ある命題が真である状態とは、その命題が真であるような、認識的に可能な世界の集

合（命題を可能世界の集合と同一視するならば、命題そのもの）と考えることができ、状態空間とは、認識的に可能な世界全体の集合と考えることができるだろう。状態は細部まで定められている必要はない。

13. 本節の反論に対して期待価値からの議論を擁護するもう 1 つの議論は、認識的麻痺に陥っていないことは、認識価値が成り立つ（あるいは存在する）ための必要条件であり、それゆえに $v'_2 = v'_3 = v'_4 = 0$ である、あるいは v'_2, v'_3, v'_4 の値は未定義であると論じている。しかしながら、このような立場を擁護することは難しいだろう。この考えは、さらなる議論なしでは懐疑論者に対して論点先取であるように思われる。うえに、たとえば、認識的麻痺に陥っている状況ではどのような信念状態も認識的合理性の観点からは同等であるというもっともらしくない考えを受け入れることになると思われる。
14. 意思決定理論においては、確率を付与することができないような不確実性[uncertainty]の状況と、確率を付与できるリスク[risk]の状況が区別される。無差別原則は不確実性の状況をリスクの状況へと変える力を持つが、本文で論じたように、この原則にはさまざまな問題が指摘できるため、適用は慎重でなければならない。
15. 私の見るところでは、エンタイトルメント論として有望な、意思決定理論的な着想にもとづかない議論は提示されていないが、そのような議論がある可能性は本稿では否定できない。他方、エンタイトルメント論に対しては本稿で論じられなかった他の問題も提起されており、たとえば、認識的保証を持つ命題が、証拠による保証を持つ命題と、エンタイトルメントによる保証しか持たない命題の 2 種類に分かれてしまうことに由来する問題（McGlynn 2014, 2017）が挙げられる。
16. たとえば、Pryor (2000, 2004) が提案する独断主義の立場を挙げることができる。

参考文献

- Bostrom, N. (2003). 'Are We Living in a Computer Simulation?.' *Philosophical Quarterly*, 53 (211): 243-55.
- Brueckner, A. (2007). 'Hinge proposition and epistemic justification.' *Pacific Philosophical Quarterly*, 88 (3): 285-7.
- Hazlett, A. (2006). 'How to defeat belief in the external world.' *Pacific Philosophical Quarterly*, 87 (2): 198-212.
- Jenkins, C. S. (2007). 'Entitlement and rationality.' *Synthese*, 157 (1): 25-45.
- Kelly, T. (2003). 'Epistemic Rationality as Instrumental Rationality: A Critique.' *Philosophy and Phenomenological Research*, 66 (3): 612-40.
- McGlynn, A. (2014). 'On Epistemic Alchemy.' In D. Dodd & E. Zardini (eds.), *Scepticism and Perceptual Justification*, Oxford: Oxford University Press, 173-89.

- (2017). ‘Epistemic Entitlement and the Leaching Problem.’ *Episteme*, 14 (1): 89-102.
- Pedersen, J. L. (2009). ‘Entitlement, value and rationality.’ *Synthese*, 171 (3): 443-57.
- Pritchard, D. (2005). ‘Wittgenstein’s On Certainty and Contemporary Anti-scepticism.’ In D. Moyal-Sharrock & W. Brenner (eds.), *Readings of Wittgenstein’s On Certainty*, London: Palgrave Macmillan, 189-224.
- (2015). *Epistemic Angst*, Princeton: Princeton University Press.
- Pryor, J. (2000). ‘The Skeptic and the Dogmatist.’ *Noûs*, 34 (4): 517-49.
- (2004). ‘What’s wrong with Moore’s argument?.’ *Philosophical Issues*, 14 (1): 349-78.
- Tucker, C. (2009). ‘Perceptual Justification and Warrant by Default.’ *Australasian Journal of Philosophy*, 87 (3): 445-63.
- Volpe, G. (2012). ‘Cornerstones: You’d better believe them.’ *Synthese*, 189 (3): 317-36.
- Wright, C. (2004). ‘Warrant for nothing (and foundations for free?).’ *Aristotelian Society Supplementary Volume*, 78 (1): 167-212.
- (2007). ‘The perils of dogmatism.’ In S. Nuccetelli & G. Seay (eds.), *Themes from G. E. Moore: New Essays in Epistemology and Ethics*, Oxford: Oxford University Press, 25-48.
- (2008). ‘Internal-external: Doxastic norms and the defusing of skeptical paradox.’ *Journal of Philosophy*, 105 (9): 501-17.
- (2014). ‘On Epistemic Entitlement (II): Welfare State Epistemology.’ In D. Dodd & E. Zardini (eds.), *Scepticism and Perceptual Justification*, Oxford: Oxford University Press, 213-47.